



迷 路

第 二 部

野上彌生子著
岩波書店刊

議會が解散され、總選舉が行はれた。二つの既成政黨はあたま數で位置をとりかへ、あひだに楔のやうに割りこんだ二十四名の無產黨が、一種生新なおどろきを社會に湧きたたせた。わけても、これらの議員が到るところで最高點をえたのは、言論の嚴しい壓迫の下で、デフテリ患者のやうに發聲機能を奪はれてゐた民衆が、口に出せないことを行爲で示したのだと見なされた。選舉されるまでは尤もらしい綱領、政策を掲げながら、平氣でそれを裏切るこれまでの代議士の無節操と墮落に愛想をつかしつつも、一方に強力に燃えあがつて來たファッシズムにはまだ多くの危惧をもつてゐた彼らは、そのどちらをも選ばないため、どちらにも屬しないものを選んだに過ぎないとしても、それを行はせたバネは、強權がしやにむに押しつけようとするものを反ね返し、もつと違つた、もつと危げのない、もつと筋道の通つたことを、軍事にも、外交にも、その他のあらゆる政治的なものにわたつて望んでゐる共通の意圖であつた。だんだんと暗く垂れこめて來

た空のどこかに、思はぬ薄陽がにじんだやうな明るみが、社會の一隅に漂うた。しかしそれも瞬間であつた。ひとかたまりの黒雲が、突如として天を包んだ。この出來事は、數日まへ選舉がもたらした驚きとはまるで反對の、怖ろしい驚きに民衆を投げこんだ。

省三は胃痙攣のあとで阿藤家を休んでゐた。今日あたりは出勤した方がいいのだと思つたが、痛みだけは收つてもまるで精がなく、それに二月にはひると癖になつたやうに降る雪が、その日も白墨の破片をばらまく風情で散亂してゐるのを、枕もとの窓越しに眺めると、もう一日さぼつてやれ、といふ氣になつた。四五日まへの夜、小田を小石川の下宿に訪ねて遅くまで話しこみ、出ると降りだした雪が風でふぶきめいて吹きつける中を、いくら待つても電車が來ず、やつと拾つたくるまで冷えきつて歸つたのが祟つたのだから、用心もあつた。しかし晝過ぎにはとにかく起き、牛乳を沸かして飲んだついでに、どてらのまま二階からおりた。岡本老人の澁い顔は無視するとしても、忠文の學課を何度も休むのが氣になり、明日は出ることを知らせておかうしたのである。階段下の電話室の前で、洗面場の方から手を拭き拭きやつて來たアパートの肥つた五十男の主人に出逢つた。と、いきなり呼びかけられた。

『大變なことをやりましたねえ。』

『え？　なんです。』

『御存じないんですか。大臣が皆んなやられたんですよ。青年將校が兵隊をつれて行つて、襲撃したんです。』

すうつと脳天が眞空になつた感じに次いで、熱い戰慄が、潮の引つ返しのやうに身體ぢやうに充滿した。省三は開けかけた硝子戸のハンドルを掴んだまゝ、言葉が出なかつた。肥つた主人も、突つこんだつもりの手拭が、コール天のズボンの横にぶら下つてゐるのに氣がつかず、それだけ囁語めいてしやべつて、せかせか向側の事務所にとびこんだのを見ると、省三も追つかけるやうに一緒にはひつて行つた。つねでもアパートの俱樂部で、また放送局である部屋には、五六人のものが、リノリュームの床の煉炭ストーヴを圍んでもう集まつてゐた。出來事は、誰をも自室にちつとしてゐられないほど興奮させてゐた。同時にいかに素早く今日の衝動的なニュースを耳にしたかを、めいめい自慢しようとし、またそれに對する見通しや、意見を、チェリやバットの煙とともにまちまちに吐きだした。

『機關銃隊で乗りこまれたんちや、どんな屋敷だつて一と溜まりもありませんや。』

『さつき郵便局で逢つた人は、かみさんが夜明けに産氣づいたんで、産婆さん呼びに行く途

中、兵隊のぎつしり乗ったトラックに出喰はしたんださうですよ。』

『こんな無茶をやつて、あとは一體どうする氣だらう。』

『いよいよファッシュ内閣でさ。』

『とにかく、達摩さんまで重傷させるなんてのは氣狂ひ沙汰ですよ。あとに何が出来たつて、それだけは世間で承服しませんや。』

かう斷定的にいつたアパートの主人は、風が出てかたかた鳴る窓の、煤けた硝子に投げつけられる雪を透かして見て、なにかそれに怒つてゐるやうに、荒つぽく椅子をたつて隅戸棚をあけた。茶盆が持ちだされ、ストーヴの上に沸つてゐる藥罐の湯で熱い茶が出来た。ファッシュでもなんでも、そんなことはどうでもよかつた。ただ彼は多くの市民と同じく、達摩さんの渾名で親しまれてゐる恬淡達識の大藏大臣のファンであつたから、その人まで暴動の犠牲になつたといふ噂に、直接的な無念さを感じるのであつた。

『菅野さん、あんたはどう見ます。』

椅子が足りないの、窓下の三疊だけたたみを入れた隅つこにゐた省三に、主人は茶盆をつきだしながらきいた。傳へられる通り大藏大臣は深く傷づいただけか、ほんとうは死んでゐるので

はないかの疑ひで、意見が分かれてゐた。

『さあ。』

茶碗を受けとるあひだ間をおいでから、省三はあどの方の考へ方に加はつた。『これはしかし、機關銃隊で製つたといふのを事實としての話ですが。』

『さういへば、號外一つ出たわけぢやないからね。』

アパートの主人は、どうかして重傷にとめておきたいのであつた。『殊にこんな噂は何倍にも大くなるものだし、まだまだ本當のことはわかりやしない。とにかく、あの人だけは私は殺したくないんだ。』

『大丈夫だよ。おやちさんの一念だけでも達摩さんは助かつてる。』

朝鮮の礦山で、一時は二三百萬の金も握つたと自慢する毛深い赫ら顔の、獨りだけ安葉巻を銜へてゐる男が横から慰めると、深夜のトラックの話をした男は、機關銃だけは間違ひない、と主張して、番茶をごつくり音させて飲んだ。彼はなほ、兵隊が悉く白禪で、ばんざあい、ばんざあい、と凄い威勢であつた詳細を語りつづけようとした時、後のドアがあいた。省三の筋向ふの部屋にゐる、どこか夜の中學を教へてゐる若い教師が、それを拂ふのも忘れたやうに、襪にそうて

雪の白い洋傘を提げてはひつて來た。

『あつ、Nさん。』

アパートの主人は、それを見ると待ち構へてゐたやうに問ひかけた。『新聞社には、委しいことがわかつてゐませんかねえ。』

『今兄貴の社へ行つて來たんです。』

中學教師の血の氣の失せた細長い顔には、小さい眼がいびつに吊りあがつてゐた。彼はそれだけで言葉をきり、みんなが掛けた椅子の後をぐるりと半圓に廻つて、疊の方からストロヴに近よると、すぐ蒸氣をたてはじめた洋傘を支柱にして、なにか嚴然と突つ立ちながら、四人の顯官の死と、一人の行衛不明について語つた。

『——え？ 重傷なんて大嘘です。大藏大臣まで死んだとなると、てきめん爲替相場にひびくから、生きてるやうに見せかけてるんです。しかし痛快にやつたもんぢやありませんか。一遍思ひきつて——』

『人を殺して痛快つてこたあない。』

なにか叩き落すやうな言葉といつしよに、アパートの主人は椅子ごとぐいと彼の方に向き直つ

た。彼をそこまで激昂させた筋道を知らない中學教師は、その調子に釣ひこまれるより、却つてぼかんとした呆れ顔で相手を見つめた。しかし彼がもう一度口をひらいて、右でも左でも構はない。現在の社會の蟻地獄から自分たちを救ひだしてくれるものなら、どちらでも賛成だ、と述べたてゐるのを省三は聞かないで部屋を出た。彼自身もすぐ木津を考へだすべきであつた。昨秋、希望通り滿洲に行つた彼は、支那を廻つて正月には歸つて來てゐた。しかし、こんな時社にちつとしてゐる男ではないし、また新聞社の電話もみんな塞がつてゐる筈だ、と危ぶみつつかけたに拘はらず、運よく木津の冴えた幅のある聲が、受話器いつばいに反響した。

『うん、とうとうやりあがつた。——さうだ、悉く即死で、内閣は總辭職だ。あとの豫想はまるでつかない。え？　來たつて、僕は出かけるんだよ。どこかもぐり込んでやらうと思ふんだ。情勢がもう少しはつきりするまで、用事のないものは引つこんでゐる、どさくさ紛れに、どんな無茶をおつばじめないとも限らないからね。』

痛みのあひだ絶食をつづけた疲労も一時に發したやうに、階段をあがる省三の足もとはふらつた。部屋に戻つてもう一度床の上に倒れると、壓し潰され、空っぽになつたチューヴにも似た無力感が、侘しく胸に迫つた。身動きもせず、天井の薄い漆喰の雨じみを見あげてゐるうち、兩

方の腫がだんだん鼻柱へ寄つて來たのは、電話の最後にいはれた言葉を意識に反芻しはじめたのであつた。たとへ記者の特權に隠れたにしろ、木津自らは自由に飛びまはつてゐられるのに、誰にどんな用心をさせようといふのだ。わけても、憫むべききやべつの枯れ葉に過ぎない自分なんぞに、と、ばかばかしかつた。にも拘はらず、それだけの忠言を取へて彼に残させたほどの過激性を、新聞社あたりはこの動亂に感知してゐるのであらうか。大震災に際して、アナキストの首領とその同棲者を絞め殺した手は、今日血に塗れてゐる手と同じ手であつた。また同じ時の鮮人さわざも、有爲な勞働運動者の何人かの虐殺も。——不意にまつ黒な洪水が、だぶだぶ蒲團の下に汎濫して來る感じとともに、その渦に押し揉まれ、挫け、ばらばらに千裂れ漂ふ社會機構の棟木や、柱や、床板を、彼はまぼろしに追うた。これらの崩壊は、理論も目的も別ではあるが、數年まへの若い世代にとつては一つの必然としての認識であり、彼らが刑務所に繋がれたのも、職場を追はれたのも、省三自身のやうに學校から締めだしを食つたのも、その理念に殉じようとしたためであつた。思ひの外にも嚴しい防波堤で奔流が阻まれた末、取つて代つた、似てゐるやうで、根本の火藥を異にした破壊力の爆音にただ耳を貸しながら、ストーヴを圍んで噂話しかしないといふ状態が、曾つての氣負つた仲間想像されたであらうか。——ふと脚に觸つた冷たい灰

爐を、省三は疊に蹴だして寝返りをする、遣り場なく身うちに噴きあがつて來るものを、それで壓へつけようとするかの如く、夜具の襟を咽喉もとに引き締め、凝結したままの視線を、低くぶら下つた電燈の乳いろの笠から放さなかつた。木津が輕井澤で、彼の社の杉田のひそかな運動なるものについて語つたのを思ひだしてゐた。奉天事件このかたの軍部の動向からいつても、それを裏づける國粹主義の理念の狂信的な最近の燃えあがりから見ても、日、支、露の結びつきといふやうな考へ方は、一般的にもさうであるが、取りわけ若い軍人を誘ひこむ可能性はない筈だ、と省三は聞かされた時からさう信じたし、その主張に杉田が果して眞劍であるかにも、疑ひをもつてゐた。しかしその問題を、木津とまともに論じあふやうな機會はその後なかつた。といふよりそんなことをいつかしやべつたか、彼はもう忘れてしまつたやうな顔で滿洲に飛びだし、月初めに歸つて來ても相變らずせかせかやつてゐて、小田と牛肉を提げて、一と晩土産話を聞きに行く約束さへそのままであつた。もつとも不快な想像に於いて、たとへ杉田のやつてゐたといふことが、最近とりざたされる左翼崩れのごろつき化で、誰からか金を引きだすだけのからくりに通がないにしろ、また彼と木津との關係がどの程度であつたにしろ、今日の椿事の輪劃は、普通の記者以上にわかつてゐさうな氣がした。省三は明日にも木津を捕まへてやらうと思つた。

右隣りの部屋の窓のあく音がして、若い細君の聲が甘つたるく響いて來た。

『あら、積もつちやつたのよ。あんた。こいちや淺草もおつくうだわね。』

奥の方でなにかいつた夫は、まだ床にゐる風であつた。細君も寢捲のままと見え、

『おお、寒む。』

と大げさなひ方で、窓はびしやつと締まつた。軍需品工場の監督代理といふ男が、女給あがりの白い蛾のやうに肥つた細君と、先月越して來た。夜勤で、省三が歸る頃には出かけてゐたが、十日目ぐらゐに非番があり、一度ぶつつかつて、これは困るぞと思つた。彼はぬいだばかりの外套をまた着こんで、脱げだした。今日もその日に當るらしかつた。さうして淺草行を、雪のため炬燵と蓄音機の愉しみに換へたやうで、勝太郎がとつびな高調子で島の娘をうたひだした。

南京じたみを栗いろに塗つた見かけだけの洋式で、間仕切は、棟割長屋とかはりのない壁から筒抜けに傳はる突然な流行歌は、時が時で、ピストルがばんばん鳴つてもさうは驚かなかつたらう、と思ふほど省三を愕然とさせた。彼は反對側に敷いた蒲團の中で、ぐるりとその方へ向き直り、書棚を防壘にしても、半分は塞ぎきれない壁を見まもつた。蓄音機は、暮れのボーナスに買ったといふ自慢のものがら、そこに現れる歌手たちは、今の勝太郎でも、それにつぐ最負の林

太郎でも、普通の肉の咽喉の代りに、金屬製の筒でももつてゐるに違ひない、と聴くものに思はせるが、部屋の二人は、どんな響き方をしようと、ただ高い聲を出させさへすれば景氣がよいのであつた。それ故島育ちの娘が、いつもの通りきんきん詠歎するあひだに、細君の身を揉むやうな忍び笑ひが、くつくつと、デュエットになつて絡んだ。

『まだ、騒ぎを知らないのだな。』

最初の驚きは、どんな動亂が勃發しようが社會の大多數のものは、おそろくこんな有様で迎へるのかも知れない、と思ふ感動に變つてゐた。バステューが破壊された時、パリの一般の人たちはなんにも知らなかつた、と書かれてゐることも胸に浮かんた。獨り者の男臭く汚れた枕の上で、省三はすこし瞼の落ちくぼんだ眼を薄く見ひらきながら、小唄に入れかはつたヂャズに、呆然と耳傾けた。

『菅野さん、菅野さん。——』

誰かが追つかけて來た。逃げなければならなかつた。前の普請場に隠ればいいのがわかつてゐて、手足が、木片細工の人形のやうにばらんばらんになつて歩けなかつた。自由の利かないその人形を、自分でむりやり駆けさせてゐる氣でもあつた。今にも捕まりさうで、もう駄目だと思

ひ、いひやうもない、せつば詰まつた、絶望感に突き落された。

『おやすみになつてゐますね。』

その聲で省三は眼を覺ました。白髪の小さい雑仕婦が一通の航空便をわたし、壁のスイッチをぱちと押した。雪明かりのほの白い夕闇の部屋が、忽ち夜になつた。

『眠つてばかりゐる。』

『しんが疲れきつたのですよ。なんにも食べなさないから。今夜はお粥でもかけませうか。』
机のそばの瀬戸火鉢からたづねるのには黙つたまま、省三は床に起き直つた。手紙は伯父の嘉助からであつた。亡父の末弟で、故郷の身寄では誰よりも省三に情愛をもつてゐながら、交通は殆んどないのに珍らしく來たのが赤線つきである。ただごとではないのを豫期して封をきり、古風な候文を二三行讀むとともに、省三の頬は硬ばつた。端から卷いて行つた手拭ほども長くはない手紙を、もう一度逆に辿つて見たりして封筒に入れると、遅い返事とも、獨りごとともつかず、ちよつと出て來るかも知れないといつた。

『まだ降つてるの、をばさん。』

『ええ、降つてますとも。』

唐辛子ほどの火種をたんねんに炭の上に集めながら、それでなくとも、今夜のやうな時に外出するものではない、と雑仕婦は年寄らしいおせつかいをした。『大臣たちを殺した兵隊たちが、方方に隠れてゐるといふちやありませんか。三番のAさんは、お役所の歸りにどこか騒動のあとを見て來たらしいのですよ。今に戦がはじまるから、をばさん、パンでも、罐詰でも、買へるだけ買ひこんでおけなんて、脅かされちやつて。』

それに耳を貸しながら省三は立ちあがり、弛んだしごきを襦袢の上に締め直した。なにもかもぶつ突かりあつた感じで、さて、ゐるかな、と考へたのは垂水重太のことであつた。一と寝入里したためか、朝よりしやんとして、出かけるだけの氣力が取り戻されてゐたが、在宅にしる、この騒ぎでの訪問客に取り巻かれてゐるに違ひなかつた。とにかく、電話をかけた上でのことにしよう。――炭火をおこす時には、窓硝子をすかしておいてくれ、と何度頼んでも忘れる雑仕婦の氣のよい間抜けをも、省三は今は咎めず部屋を出た。

取りつぎの書生の聲は、主人は大阪へ旅行中で、今夜の終列車で歸京する旨を答へた。

『それでは――』

奥さんといひかけて、多津枝に變へた。輕井澤の暗い雨の日の出來事は、二人にそれまでと

は違つたよい結びつきを興へたやうにその時は感じられたに拘はらず、彼らは却つてよそよしくなつた。多津枝はなにかほろをさらけ出したやうな負け惜みから、いつそんなことがあつたか、といったやうな顔をわざとしてをり、省三はまた、彼女を相手に告白じみたことをいふがものはなかつた、と思ふところが、その態度を見るにつけても深まり、よくよくの用事でなければ出かけもしなかつたし、行つても多津枝は出て來ないことさへあつた。しかし今夜はそんなことを顧慮する氣にはならず、呼びたてても、彼女の方からづかづか話された。

『もし、もし。』

三分と待たせないで響いて來た聲は、大變だわね、と用事をきくより先にすぐそれをいつた。その調子に近頃になく自然な親しみがこもつてゐたのも、異常な一日の影響であつた。

『郷里ぐくにから、電報か手紙か來てゐない。』

『さあ、よく知らないけど。』

『小父さんは今夜歸るのだつて。』

『まだ二三日あとの筈だつたけれど、騒ぎでたつたのだわ。なにか急な用事。』

『僕の方にも、騒ぎがもちあがつてゐるんだ。』

『どうしたつて。』

『郷里の兄貴が引つ張られたんだよ。選舉違反で。』

省三の聲には、心配より腹立たしさの方が強く出てゐた。それが手紙を読んだ時の實感でもあった。政友と民政の兩黨の對立は、ねぎ一本、豆腐一丁も反對派の店では買はないほど激しい土地柄で、それも政治上の主義主張より、集團の傳統的敵意になつてゐるだけ、お互ひの睨らみあひは根深かつた。菅野家は政友會の地方的な本營であり、その中に育つて、代議制の裏面からくりと墮落を子供の時から知りぬいてゐる省三は、左翼的にものを考へることを學ぶ前でも、若い潔癖なところから、現在の政治には少しも幻影をもたなかつた。同時に亡父ほどの幅もなければ、徳望もなく、また手腕にも缺けた兄の喜一の政治運動は、家として仕方のない役廻りであるのを知りつつも、いい加減によせばいいのに、と思つてゐたことで、檢舉にも舌打ちされるのであつた。

『都合では、ちよつと歸つて來るかも知れないんだ。——何日つて、まだ——なあに、——聞こえない。』

雜音がふいこのやうに交りだした。省三はエボナイトの黒い筒に口をつけ、それにつけても相